

---

# ニガテを越えて

弥月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二ガテを越えて

### 【Zコード】

Z9903S

### 【作者名】

弥月

### 【あらすじ】

友人に頼まれて私が苦手な彼に飲み会の誘いを申し込むことになりました。

任務遂行のため誘ったのまではよかつたのに……。

どうして今私は喫茶店で彼とお茶を飲んでいるのでしょうか？誰か分かる人教えてください。

うん本気で!!!!

一様。ラブなコメを目指してみよつと思ひます。  
つたない文章かも知れなideすが^ ^ ;  
よろしくお願ひします。

## 1話 誘い

駅近くのある小洒落た喫茶店。

中もレトロな雰囲気に包まれてゆっくりといった時間が流れている。本来なら落ち着けるはずの空間なのに、かなり気まずい空気が私の気を重くする。

冷や汗がだらだらと流れるのを感じながら相手は相変わらず無表情。友人の頼みを聞くんじゃなかつたと思つても後の祭り……。

「里美お願ひ……」

友人が珍しく声を張り上げて言うから何かと思えば話してみたい人がいる、でもつて今度の飲み会に誘つてきてほしいとの事。彼女がこれ迄に誰かを誘うとか言つたことはあまりなく、人見知りする彼女が言つてきたのだ。

どうした心境なのかわからないけど頼つてくれるのが嬉しくて快く引き受けたが……。

まさか引き受け相手が私の苦手に思つていた伊達くんだ。いつも無表情というか感情が読み取りにくい。

(私的にはだけど……)

なんとなく近寄りがたくて同じ学科なのに未だに話したことがない。でも友達の頼みなのだから叶えてあげないと……つと意気込み。今日の講習が終わったときを狙つて声をかけたのはいいものの。伊達くんのお得意のポーカーフェイスで「何?」との一言に私は思わずたじろいだ。

(だつて苦手なんだもん!—!)

頭の中で言つと決めていた言葉は、すっかり抜けてしまい。あたふたしている私を見かねたのか「付いてきて」と言われ、今の喫茶店に案内されたのである。そして今まさに「コーヒーを飲んでいる」という何とも可笑しな状況になつてます!—!未だに任務を今だ果たせてないし……。伊達は優雅にコーヒー飲んでるけどな!—!

(せつかく伊達くんがチャンスをくれたんだから言わなきや!—!)

握り拳を作り、気合を入れて腹を括つたとき、

「何で呼んだわけ?山野」

「えつあの……その……」

「はつきりしない奴だな。今日声かけてくれて嬉しかったのに

先まで無表情だった彼が表情を和らいだ。

とうか、今伊達くんがはにかんだようにも思える。

(『気のせいかな?』)

でも先ほじまでの氣まずさが和らいだ気がした。今なり皿べそう。私は皿をひやんと伊達くんに皿を皿わせて、

「ちょっと頼みといつか……。お願いがあるの」

「何?」

「今週の週末に飲み会をやるんだけど伊達くん来てくれないかな?」

「……それって普通頼みとかじやなくて誘いじやないの?」

彼がきょとんとじて聞くから、自分の間違えに気付かされたけど慌てて、

「そつ!…そつなの!…誘い誘い。友達がどうしても伊達くんと飲みたいて」

「ふーん」

早口で言うと伊達くんは興味なさそつに相づちをしてくれたがまた素つ氣ない態度に戻ってしまった。

(句でー? )

「……山野は来ないの?」

「感つ私に伊達くんが、

「えつわつ私！？」

「うん。山野」

なぜ私と更にびぎまきしてしまった私に対して伊達くんはじつと私を見て動じていない。

なんて頑丈な仮面でも例えようか……。

私は冷や汗をかきながら、「もつもちろん行くよ」声が裏返りながら精一杯の笑顔と共に言った。

「……じゃ行く」

「本当！？ありがと」

なぜ私が飲み会に参加するのか聞いてきたのは謎だが、とにかく来てくれることに安堵した。

やつと落ち着いてアイスミルクティーを飲める。

そうと決まればと鞄から手帳を取り出して友人に指定された時間と日程をページを開く。

週末の所に大きく赤丸とくに集合と書かれていて、友人の必死さが伝わってくる。

(これ、美穂ちゃんに搔つ攫われてまで書かれたからよつほど必死だつただろうな)

友人の必死さに思い出し笑いをしてしまいそうになりなんとか堪えた。

伊達くんには気づかれなかつたみたいでセーフだつたけど。

私はなるだけ冷静に伊達くんに伝えると頷いてくれたので当日も大

丈夫だわい。

伝えることは伝えたのでほっとした。

緊張して今まで飲む余裕さえなかつたために置いていたアイスミルクティーを口に含む。

だいぶ時間が経つてしまつたためコップの結露が出来ているがまだ冷たく甘い味が広がる。

すっかり気を落ち着かせた私は後は帰るだけと思つたのに、急に伊達くんが何かを思い出したように隣に置いていた鞄をあさりはじめ。

探していた物が見つかったのか鞄から何かを取り出して私に、

「山野アド教えて」

「えつ」

「連絡取れないだろ。他のメンバー俺分からんんだし」

言われてみれば確かにそうだ。

私だつてそこらへん友人から聞かされていない。

必死に誘つて来きてと言われただけだ。

（失礼すぎたかな……）

思考がマイナスの方にしか浮かばなかつたがなんとか振り切り、慌てて携帯を探す。

「そつそつだよね。気が利かなくてごめん」

「別に謝らなくても。それに気使わなくてもいいよ」

そう言われても相変わらず表情が読めない伊達くん。

私はどうすればいいか戸惑つていや落ち込んで、

重い口が開くけども言葉は繋がらず、出ても「……でも」としか続けられない。

どこか気が重くてでも考えがまとまらなくて、小パニックを起こしそうになつたときには、

「山野。 そんなに気にしてたらハゲるんじゃないか」

「なあ！…だつ伊達くん！…？」

「だからそんなに悩むことないじゃないか？ 同い年なのに」

抑えながらに笑う伊達くん。

でもはつきりと私に目を細めて綻んだ笑顔に驚きを隠せない。

私の体が一気に沸騰したように熱くなる。

悩んでいたことが恥ずかしくて、それに初めてみる笑顔にちょっとびっくりした。

だって爽やかに笑うから。 私の中のイメージが変わった気がした。

（やつぱり、話してみないと入つて分からぬのね）

本当は話しやすい人なのかも……。

伊達くんの認識を改めていたが、まだ笑い続ける伊達くんの頬がほんのりと赤く染まっている。

確實私ほどではないけど私は頬がひりひりするぐらい熱を帯びているんだから、

きっと今鏡をみたら真っ赤なんだつとそれはそれで恥ずかしい。

失態と苦手から早く開放されたいのにいつこうときたに限つて探し

ても見つからない。

もしかして家に忘れてきたかな……。そういえば今日使った覚えないし。

「見つかった？」

「えっと……。家に忘れてきたみたいですね」

「やつ」

その一言を伊達くんが言つとテーブルの上にあつたアンケート用紙のボールペン取り、

私の手帳が目に入ったのかメモの所あるよね?と聞かれたので素直にそのページを開いて伊達くんに渡した。

なんだろうかと私は首を捻つたが伊達くんは何かを書き始めた。  
さらさらと書きすぐに手帳を返してくれた。

目線を手帳に移すと、名前と電話番号、メールアドレスが書かれていた。

しかも綺麗な字でちょっと悔しい。

手帳を睨みつけていたら、伊達くんに呼ばれて顔を上げたら立ち上がりて鞄を背負つていた。

ただ不自然に何かを堪えてる顔をしたけど……。

何だろうと思考が空転しそうになつたとき。

「LINEに連絡して」

「えつあつわかった」

慌てて現実に引き戻つてなるだけ自然を装つて返答した。  
伊達くんは微笑んで(私が見えただけかもしれないけど)、

「じゃ俺先に庄のよ。山野は気をつけて帰えりよ

「うん。あつがとつ

このとき伊達くんにつられて自然に笑顔が出来たのは自分にとって  
ちよつと驚きだけど、  
苦手加減がちよつとくらこは軽減されたのかなつと思つといれし  
な。

伊達くんの背中を見送つて、後はゆつくりアイスミルクティーを飲  
み干した。

後ほどあること気がつく。出来れば見送るときに気づかばよか  
つたんだ。

まさか伊達くんに伝票を取りられていたなんて思いもしなかつたから  
……。

なんて紳士!!

店員さんからは微笑ましく見られたよつな気がするじ。いやカンベ  
ンしてください。

軽減したって言つても苦手には変わらないのよ……!!

(今度会つたら絶対お金返さなきや)

心に誓つて。喫茶店を後にした。

今週末私は果たして生きていられるのだらつか。  
不安だけが募つたのは言つまでもない。



## 2話 ありえない！？

重い足で家に着いた。なんかやけに疲れた気がする。家に入ると、私以外にまだ帰つてきていみたいだ。お母さんもいない。

まあいつものことなんだけれど。

自分の部屋に行き、肩にかけていた鞄を下ろす。

まだ日があるためにオレンジ色の夕日が窓から差し込む。

白で統一されている部屋なため綺麗にオレンジ色に染まっていた。この年になるとぬいぐるみなど、興味がなくなつてしまつたのでつい最近整理したら、なんか女子の部屋ではないような。よく言えばすつきりした部屋。悪く言えば殺風景な印象を与える部屋になつてしまつたがこれはこれで落ち着くので私は気にしない。

いつものようにベットに腰掛けると枕の隣に携帯が置いてあつた。

「やつぱり忘れてた」

見ると着信が三件入つていた。

携帯を開き、見ると“五嶋美穂”とディスプレーに表示されていた。

この人物こそが、私にお願いしてきた友人だ。

この友人が伊達くんと飲んでみたいと言わなければ、関わらずにすんだのにとため息をひとつこぼす。があんなに必死に頼まれれば引き受けける他はない。

なんせ美穂ちゃんは可愛い。

大人しくて人見知り激しいけど黒髪の綺麗なロングヘアは、私も羨ましいくらい綺麗で、まるでお人形さんみたいなのだ。

それを本人に言つとムキになつて反発するところなんか、なおのこと可愛い。

ついついお節介を焼いてしまう。

私がとても可愛がっている子なのだ。

だからはなつから断れないことは重々承知していた事なのだから仕方ないことだ。

だが、なぜ着信があるのでうつと思いかけ直してみる。

トゥルルルルル……。

トゥルルルルル……。

と何度も「ホール音をして「もしもし」声が耳に届いた。

「美穂ちゃん。私、里美だよ」

「よかつた。里美ちゃん電話かけても繋がらないんだもん。心配しちゃつた」

「ごめん。携帯家に忘れちゃつて。といひでびうしたの?何かあつた?」

「えつとね。伊達くんの件が気になつちゃつて……。どうだつた?」

ああやつぱりそうですね。

私は心で大いに頷いた。

だつて私も同じ立場だつたらきっと同じ行動してるもの。

そう思つと笑みがこぼれた。

「大丈夫だよ。伊達くん来てくれるつて

「本当!~?よかつた」

美穂ちゃんの喜んだ声が聞こえてなんだか私もうれしくなる。

頑張った甲斐があつたなつとばつかしに、あとは当口だけ我慢すればいい話だし気を楽に考えていた。が連絡を取ることを思い出しちょつと氣が重くなつたのは置いといで。

「私も聞きたいことあつたの。飲み会のメンバーなんだけど」

「あつ「めんね。伝えてなかつたね。伊達くんが来てくれるつて確定したから4人よ」

「ありがとう」

「あつあつの里美ちゃん。ちょつと言つておいたけど……」

喜んだ美穂ちゃんの声が、ちょつと曇つた氣がしたが、ビリしたんだろうと思つた。

何かと思つて聞き返してみれば、

「実はね。私の連れがどうしても遊園地行きたいつて聞かなくて場所を変更したいだけど」

「へつ?」

「ここのよね? 早めに切り上げてから飲み会つて」とになつてるからそのこと伊達くんに伝えてほしいだけど里美ちゃんお願ひできるかな

「な

急な事に頭が動転した。まさかの予定変更……。

でも電話から聞こえる声はなんだか弱々しくて、きっと電話の向こうで眉をへの字にして困つてているのだろう。その姿を想像して思い浮かべてしまつと益々断れない。

寧ろ何でも任せたとしても、いつまでもこの効果をもつていいのだ。

よくよく考えると……。

……やっぱり怖いので深くは考えない事にするけども。どうせ連絡を取らなければ、ならなかつたので気が乗らないけど引受けた。

「ありがとう。じゃ場所は新宿駅に一〇時に集合だよ。じゃね」

「うん。わかった」

近くにあつた紙に言われた通りにメモを残すと、美穂ちゃんに呼ばれて「うん?」と聞き返してみればふふと笑い声が聞こえたあとに「ハーンと可愛くしきりね……あと絶対スカートは履いてくるんだよ……」

「えつそれどひ「絶対だよ」ちよつ美穂……」

どひこの意味かわからないまま通話が切れてしまった。

(どひこの意味なの……普通は美穂ちゃんが田立たなきやうにけなくて何故私も……?)

ぐるぐると思考が空転してしまつ。

考へても出てこないのは始めからわかつていて、もつここやと思つてベットに倒れ込んだ。

片手に掴んだまんまの携帯。

まず登録から始めないとなる。

せっかくの横になつたのに、手帳が鞄の中に有ることに気が付く。取り行くのはめんどくさいが、嫌なことは早く終わらせた方が気が楽なはずと、重い腰を上げて立ち上がって鞄を持ち上げる。ベット付近に鞄を置き手帳を出す。

まだだらりと横になりながらメモされたページを開くと綺麗に書かれた連絡先が目に入る。

（本当に達筆だわ～。顔字でも書いたのかな伊達くん）

どうでもいいことを思いながら携帯のアドレス帳を押して淡々と入力する。

だが問題はここからだ。

本来ならメンバーだけを伝えれば済む話だったのに、遊園地も行くことになつたことを言わなければいけない。

美穂ちゃんのお連れさんが余計なことをしなければ、こんなことは……って言つてもしかたない。けどどうしても文句の一つも言いたくなる。

止まらないため息をまた吐いて頭の中で文章を考えていたらアドレス帳の登録を終えた。

いよいよ腹を決めて連絡をとろうとして携帯を握る。が持つたまま動けない。いや動けない。まだ夕方の時間だし、焦ることもないのだが……。

どうにも行動が移せない。だたボタン一つ押せばいいだけなのに。ああ情けない自分。

そこまで苦手意識があつたのかと別の意味で笑いがこみ上げるが声としては出なかつた。

出てもたぶん空笑いだけど。

やっぱ始めはメールかな。

きっと電話しても大丈夫だらうが私の連絡先を教えていないので出

ない可能性もあるし、忙しかったなら困るのは伊達くんだもんね。  
などと理由をつけてメールで連絡取るようになつた。

これなら大丈夫だろうと思つて簡潔に終わるはずだし！  
とさつそくメール画面を開く。

メールの用件の所に山野ですと自分の名前を載せ。

用件に

『こんばんは 山野です。

早速メールさせて頂きました。

登録お願いします。』

と書き込んだ後に連絡先を入力した。

(あとは遊園地の件ね)

文章を考えるのはすぐ時間がかかったがなんとかまとめて、  
『えつと大変申し訳ありませんが集合時間と場所が変わりました。  
新宿駅に10時になりました。

理由は遊園地に行くことになりました。もちろん飲み会もあります。

ちなみにメンバーは私の友達とその連れと私と伊達くんなので4  
人です。

何かありましたら連絡ください』

と連絡先の下に加えて伊達くんにメールした。

メールしてしまえばこっちのもんで、あとは待てばいい。

ベットの上ということもあってか夕飯前だが眠くなつてきました。

軽くだが寝てしまおう。

どうせ夕飯は8時だしと私はまぶたを閉じて眠りについてしまつた。

チャラララ～ラ～ラッラララチャラチャラ～

と機械音が私の眠りを邪魔をする。

無視をしようと思ったが鳴り止まない。

私は電話する人なんて早々いないし、そういうえば留守電設定を切っていたような気がする。

寝起き眼で携帯を探し出し、訝った声で「もしもし」と出てしまつた。

このときによく考えていれば分かつたはずだった。  
電話の主が彼だったことに……。

なんか聞き覚えのある声が聞こえる。

うーん誰だけ？寝起きせいか頭がぼーとする。  
もう一眠りしたいが本音だが。

欲求には人は勝てないもんねっとまた瞼がとじかけようとしたとき

「山野」って声が聞こえた。

どこからかと思つていたら自分が持つてる四角い薄つペらい機械からだ。

その機械から男の人の声で私のこと呼んでる？ような……。はて？  
山野って呼び捨てにする人は確か

…………伊達くんくらいしかいないなあ～～。

(うん？…………ってあの伊達！？)

ぼーとしていた頭が一瞬で冴えてベットから勢いよく飛び起きた。  
がベットの端にいたのに気づかず、支えていた手がずるりと滑つて  
ドンと大きい音をたてて落ちた。

声にならない痛さに悶絶しながらも電話を取る。

「ニッ～～。あつもしもし？」

「山野！大丈夫か？なんかすごい音が聞こえてきたけど」

「ああ大丈夫！大丈夫！気にしないで！！」

恥ずかしさに体が熱くなる。心臓も飛び出るくらいバクバクと音を  
たててうるさいくらいだ。

(ヤバい!!まじでテンパつた。よくわからないけどなんで今電話していくわけ…)

頭が混乱して事態の収集が掴めない。  
動き始めた脳で必死にフル回転してみるものの「えつと」や「その」などをして空氣に消けてしまう。  
全く意味をなさない。

(どうしよう。言葉繋がらない)

伊達くんは気を察したのか、

「もしかして忙しいときに連絡入れちゃったか?ダメならまたかけ直すけど?」

「いやいや…大丈夫よ…ちょっとびっくりしただけだから。あ  
はは」

伊達くんのなんとか気をそらせたいくて笑つてごまかした。のにか  
かわらず心配そうな声で「本当だな?」と確認していくあたり律儀  
な人だなっと思った。

もつと堅物な感じなのかと思つてたから、入つて関わつてみないと  
わからないなあつと痛感する。

でも何故そこまで気を使つてもらえるか私的には謎だつたが。  
とりあえずいい人つて事でその疑問を抑えた。

「山野?」

また上の空になりかけたときに伊達くんの声が聞こえてくる。

(ついで考へてる場合ではなによーーー)

私は息を調べてから、「うん。大丈夫」と答えた。  
あの間が怪しまれなきゃいいけど。

「よかつた」

向こうから安堵の声が耳を通り。

よく考へれば伊達くんも意外に緊張してたのかなと今更思う。  
電話つて友達でも緊張するときもあるし、今回は初めて電話する相手だから尚更するはず。だから丁寧だったのかと自分の納得した。

「山野。場所変更つてメールで読んだが

「やの……。友達のお連れさんがどうしても行きたいから一緒に行  
こうかみたいな話になっちゃったの」

伊達くんが頷いたあとわずかだが沈黙が流れた。たぶんわずかだつた。だが氣まずい空気が耐え切れずつい、

「やっぱりダメだった?」

「いやそういうわけじゃないけど。その……。やっぱりなんでもない。大丈夫行けるから」

「そう。よかつた」

「わい

一様安堵した。

「これで行けないと言われたら美穂ちやんを悲しませる」となるんだもん。それは避けたい。

「ところで待ち合わせだけど。新宿駅だよな？」

「うん、やうだよ」

「山野たしか最寄り駅は本厚木だつたよな」

「えつそつだけど。それがどつしたの？」

変な質問してくるなと思った。私の最寄り駅なんかどつでもいいではないか。

なんかいやな予感がする。直感的に感じた。（私的にだけど）でもどうせ私が聞いても、聞かなくても同じだらうからあえて聞いてみたが。

「駅同じだから一緒に行かないか？」

「えつ」

思わず、上擦つた声を上げてしまう。

口元も引きつってしまった。これがまだ電話でよかつたと安堵しつつ。

絶対あの喫茶店でこの話していたら洒落にならないくらい失礼な表情をしてしだらう。

鏡がないが自分がひどい顔をしてくる」とは容易にわかるくらいなのだから。

「いやか？」

電話から伊達くんの声のトーンが下がる。  
自分が曖昧すぎたために相手を不安にさせてしまつたみたいだ。  
自分の失態に気づいて私は急いで、

「やつそんなことないよーー大丈夫だよ」

声を張り上げて言った。煩いくらいに。  
自分が相手側だつたら耳を押さえそうなほどだつたと思つ。  
すると吹くような笑い声が耳に入る。

「そんなに慌てなくとも。でもよかつた。じゃ9時に本厚木のホームで」

爽やかに笑う声がなんだかむず痒く感じる。  
でも伊達くんを安心させられたみたいだ。一様……。  
ほつと胸を撫で下ろして、

「うん、わかつた」

私は頷いた。

場所と時間が決まればすぐに電話は終わつた。

週末まであと数日。

あとは私がどう乗り切るか。来てほしくないが願つたところで時間は止まることはないのだからどうせならドンと構えていよう私は心に強く想つて決めた。

## 4話 待ち合わせ

今私は駅のホームにいます。何故って？私だつて聞きたい。

今日、まだ遊園地や、飲み会はまだ耐えられますよ。

でもなんで私が苦手とする人と、一緒に待ち合わせの場所まで、行かなければいけないのでしょうか。

あつまあ多少の関わりで極小ですが、前よりはましになつたかもしないけど……。

大事なことだからもう一度。

極小ですよ！極小！！

うな垂れながら腕時計を見ると、約束の時間まであと5分。

ホームにはある程度人がいるので新宿に向かうのは少々憂鬱だ。だつてこの時間帯は確実に込むことは容易に予測できる。

特に途中駅では路線が繋がっているため、人の乗り降りが激しい所があるし、新宿が最終着駅つてことで巻き込まれることは確実なのだ。

せめて押しつぶされないことを願うのみ。

「そろそろかな……」

辺りを見回し伊達くん的人物を探すと、それらしい人を発見した。階段から降りてくる青年。見覚えのある黒髪短髪とその高めの身長。しかしそまだこちらに気づいてないのか辺りを見回しているようだ。今日の格好はラフな感じで決めてきているみたいだ。

伊達くんの格好を具体的言うと、白のTシャツに紺色パーカーを羽織りブラウンのカーゴパンツだろうか。

いまいちファッショニ興味ない私には、よく分からんがよく似合つてると思うよ。

なんて少し観察していたら、伊達くんと目が合ってしまった。  
するところに来て「よう」いう声と共にぶつきらぼうに挨拶する伊達くんの姿だった。

「おはよー」

不自然かもしけないけど、微笑んで答えておいた。

THE・営業スマイルって事で。

喫茶店のときや電話のときと比べるとなんだか違和感を覚える。

（なんか素つ気ない感じだな）

別に構われたい訳じやないからいいんだけど。

「……山野。なんか普段と違うな」

「そつそつかな」

笑つて誤魔化す。

そう珍しくオシャレをしてきた私。

普段はパンツのが多く、まして講義があるときは履いて行かない。スカートも好きだが自分が履くとなると別だ。

寧ろ友達とかの方が似合っているし、今更スカートを履くつてことに抵抗がある。

その私が滅多に履かないスカートを今現在着用しているのだ。

ワンピースだけど。

レースなどのフリフリ系を抑えた袖口と、スカートの裾に花柄の刺繡が施されている白いワンピース。

でも生足は見せないのでレギンスと履き、普段ストレートにしていた髪もポニーテールに結ってきた。

(「これで美穂ちゃんウケは間違えない……」)

そう確信して今日家を出てきたのだ。

思わずガツツポーズを作りたくなるほど完成度。  
褒めたいぞ自分などと思っていたら、

「山野。顔変だぞ」

「えつー!?

ぱつと手で顔を覆い隠す。

どうやら緩んだ表情が顔に出ていたらしい。

わああ私、痛い子だ。

ガツクシつと落ち込みざる負えなかつた。  
だが微かだが耳に、

「……そういうのも……な」

「えつ」

そつと言われた言葉は私に届くことはなくて、ただ顔を上げさせた。  
そのときに急にぎゅっと手を握られて。

「山野。電車が着た。乗ろ!」

言われたとたんに駆け込むように電車に飛び込んだ。

手が熱い気がする。伊達くんの体温が高いのか?  
伊達くんがなんかさつき言いかけたことが気になつたが……。

それよりもいつの間に電車が駅に着ていたのか気付かなかつた。

「どれほど自分が妄想に浸っていたか。うん、笑えない。」

走り出した電車は外の景色を瞬く間に通りすぎていへ。車内はまだわりと空いていたが、座席は空いていない。新宿まで快速でも10駅以上先。ドア付近は混んでくると思うのでやはり中にいた方が利口だらう。真ん中に入りつり革を掴もうと思ったがまだ手を繋いでゐるままといつことに気が付いた。

「……あの伊達くん」

「おうじゅうねん」

まつと懸か手。

伊達くんの顔を見ればほのかに赤くなっているようだ。

「大丈夫だよ」

えへっと笑つてみせかけて、握られていた手をそつと自分の腕を掴んで比べてみたが私の手は平温のよつだ。といつゝとはやはり伊達くんが熱かったのか。

（もしかして伊達くん気が動転してかな。なーんてね）

ちらつと覗き見ればまだほのかに赤い頬が目立つ目に映る。手を繋ぐ」ことがそんなに恥ずかしかつたんだろうか？

なんか話すにも話題は つてないな。  
思考を巡らせたがこれっぽっちもない。

だつてよく知らないし同じ学科つてだけだもん。

「あの…… もつきはその…… すまん」

「びつしょつかつ」と考えていたら伊達くんが言つてきた。

私は一瞬ぽかんとしてしまつたが恐らく手を握つたことだろ。ひばつが悪そうなでも照れも入つてるよつたな困り顔をしている。なんだか美穂ちゃんが困つたときの顔によく似ていた。

思わず見ていて可愛いかななどと思つてしまいくすつと笑いそうになる。

「もう。 気にしてないのに」

そうかつと伊達くんは苦笑をしていた。

「伊達くんつて遊園地の絶叫系つて平氣なの？」

「えつ」

「私、あんまり得意じやないから。 伊達くんはびつへー。」

「俺はわりと平氣かな」

ふつと柔らかい笑顔が田を惹かれた。  
なぜか分からぬけど。

「平氣かー羨ましいー。 内臓浮くふわあつて感覚が無理なんだよね

「そつか。 あの感覚は人によるからな」

「やつなんだよ。あのが平氣なの私信じられないもん……！」

過去に乗った記憶を辿りながら力説する。

スピードはまだしも、あの回転はアリエナイ。。。  
だってあんな高い所から落ちて上がってまた落ちる。  
重力に反して内臓が浮くんですよ……！

誰が考えたアクティビティーだーーって叫びたくもなるや。す  
ると、隣からくすくすっと笑う声が聞こえてきた。  
見ると伊達くんが口元に手を当てて笑っている。

「ちよっと伊達くん今笑うとこひ違つよ……！」

「あははつだつて山野。表情がこひひひ変わるから」

「やつそんことないよー私はいたつて普通ー」

「やつかな？やつを青くなつたと思つたら、握りこぶし作つて真つ  
赤になつてたけど」

びつへつて言つ風に伊達くんの田線が刺れるやつだ。  
そう田線で訴えられても……。

今更、違つとは答えずら。確かに思い返してみればやつていたよ  
うな氣もするから。

笑い声がやんだ。やつと収まつたのかと、伊達くんの方を向けばま  
だ笑みは残つていた。

「楽しみだな

「えつ？」

「遊園地。中学生以来だから」

「意外！高校は行かなかつた。マウスラングとか有名でしょ？」

「つかの学校そういうのなかつたなあ。あつてもなんか水族館だつたし」

そつかなどと相槌を打つてたが、淡々だけど楽しそうに高校の話とか伊達くんは語つてくれた。

私もつい他愛も無い話で夢中になつてしまつたが。

意外に気兼ねなくなすことが出来たことにちょっと安心した。

途中駅で人の乗り降りも激しくもあつたが、予想してたほど、ぎゅつぎゅうといつわけでもなく。スペースを保ちながら、無事に新宿に着くことができた。

時刻は9時50分を指している。

「改札だつけ」

「うん」

私は大きく頷いた。

まだ待ち合わせ時間には余裕だ。

だが早く美穂ちゃんに会いたいからさつさと会場に足を向ける。改札口で待ち合わせになつっていたので田と鼻の先。

私はるんるん気分で待つていたのに。。。

何故でしょうか？

一向に現れないのは……。

ここからが泣きたくなる時間の始まりだったかも知れない。

待ち人はまだ来ない。一人はまだ改札口に立っていた。

「来ないな

「……そうだね」

伊達くんとのこの会話はすでに3回目だ。

お互に苦笑する。

最初の頃よりは、嫌な空気がしないのでホッとしつつ、行き交う人々を見ながら待ち人を探すが、それらしい人物は見当たらない。携帯を眺めても返事は来ないまま。

（まさか待ち合わせ場所を間違えたなんてことないよね……）

不安な思考が過ったから。

電話をしてみると『現在電源が切れているのか、』『つとアナウンスがながれいて全く役に立たないし。とりあえずメールを送つておいたが……』。

果たして見てくれるだろうか。

伊達くんに気付かれないようにため息を吐いた。

「なあ山野。もう一人つて誰が来るんだ？」

「えつああ違う学科の男子で田辺くんつて言つてたかな

突然の話題にたどたどしくなつてしまつたが、確かに気にならなくもない。

私も詳しくは美穂ちゃんに聞かされていないから。

でもなぜか伊達くんは名前を聞くなり考え始め「やつか……」って

呟いてからは黙ってしまうし。

どうしたものかと困っていたら、着メロと共にバイブレーターの震えが手に伝う。

急いで取り次ぐと

『里美ちゃんごめんね！』

凄まじき大音量が耳を襲った。

痛む耳を押さえながら、もう片方の耳で聞く。  
どうやらパニックになつていて、なんとか美穂ちゃんを落着かせるように、ゆっくりと優しく問い合わせた。

「美穂ちゃん大丈夫だから。ねえ？」

『ああ……。うん、取り乱して』めんね

やつといつもの美穂ちゃんに戻つたのでよかつた。  
その後、事情を聞くと、携帯の電池を充電する事を忘れていたせいで、電源が落ちてしまい。連絡が取れなかつたことを美穂ちゃんは深く謝つていた。

『本当にごめんね』

「大丈夫！大丈夫！」

『ありがとう』

「いえいえ。あつ今どうするの？」

早く合流したいがために、私はさりげなく美穂ひやんに聞いた。

『今？新宿のあのねえＪＲ線の16番ホームにいるのから……つき  
『や

「どうしたのー？」

何故か美穂ちゃんの声が途絶え、私が叫んだときすぐ男性の声が聞こえてきた。

『じめんね山野さん。電車きたから先に乗つていやつた』

あははつと笑い声まで携帯は漏らわず伝えてくれた。  
なんかイラッとする。がぐつと堪えて、

「……あのじめんね様ですか？」

まず知らない相手だから聞いてみた。  
相手を知るのは大事だし、それに私を知つてることも一応は関係者だらう。

『あれ？聞いてない？俺、田辺大和』

「ああ……参加者ですね。存じております」

つい口で喋りそつになつた。

だつてこの数回の会話だが、何となくチヤツを感じるし、まともに会話しても疲れるだけな気がした。

「それより。美穂ちゃんは無事なんですよね？」

『山野さん冷たい。それに固いし、もつとポップにこじらよー。』

「……田辺さん」

『頑固だな〜。みほりんは大丈夫。隣いるよ』

悪びれない様子で言つてくる声がどうも私の勘に触る。

なんでこんな男と

ため息を吐きそうになつたのを堪えた。

集合でいいよね?』

「はあ！？」

『じゃ電車の中なんぞそろそろ失礼  
伊達くんによろしく』

「ちよつと待つーー！」

無情にも電話は切れて、ツツツーと切れた音が耳に残るだけだ。

なんだが朝から前途多難だな。落ち込みたくなる。

( ああ。もう帰つてもいいかな )

遠田で見つめてしまいたくなるほど。

今から会いに行く相手にまず会いたくないし、会いたくないし。  
大事だからここも2回言つてしまつたけど。

そして……。

確実に田辺は自己中だ！！

感じるぞひしひしと！！

（そんな魔の手に美穂ちゃんを渡すもんか！？）

切られた携帯を握り、決意する。

隣にからちょんちょんと肩を叩かれた。

首を向けると、苦笑している伊達くんの姿。

「山野。何があつたかわからないけど、今は五嶋さんの所に向かつたほうがいいな」

「あつうん。そうだね」

頷いて、JRの駅の改札に向かつ。  
だが数歩歩いて疑問に思った。

（私伊達くんに話してないのにどうしてわかつんだろ？）

隣を歩く彼を見れば、いつもどつりの顔だ。  
それにわつきなぜ笑っていたのかも気になる。  
どう聞き出そうか考えていると、伊達くんから話しかけてきた。

「さつきの電話の相手って田辺大和って言わなかつたか？」

「うん。確かにその名前だつたけど。田辺くんがどうしたの？」

そう返事すれば、また伊達くんは黙り込んでしまって、疑問を聞く  
どころではなくなってしまった。

今は電車に乗り、次の駅で遊園地に着く。

天気は晴天なのに近づく度に気が重くなる。

電車の窓を眺めながら、私は面倒事に巻き込まれないよつと祈るば  
かりでした。

やはり遊園地の最寄りだけあって人通りが激しい。

はぐれないように伊達君の後ろを追いかける。

駅を出ると、広い場所に出て、噴水が目に入る。マリーの右手側から人の並みは綺麗に一ヶ所を目指している。

「うわちだな」

「うる

私は額き足を進め、ちよつとした登り坂、歩道は綺麗でしゃべり登る。

上りきらうとしたあたりで看板に目が止まる。遊園地の看板で、でかでかと書かれた文字と可愛らしきキャラクター

ー”うーにゃん”と”みーにゃん”がいる。

このキャラクターのモチーフは語尾からわかるようにネコだ。

うーにゃんは黒ネコ、みーにゃんが白ネコと子供に大人気のマスク

ツトキャラ。

ネコ好きの私にも堪らない。

漫画のふきだしのようにセリフが書かれて『どきどきにゃわくわくにゃ』君を夢の世界に連れてあげるにゃ！へり口はもつすべにゅ

『うーにゃん、みーにゃんが言つて』

こつちが入り口大きく矢印とともに地図も載つていた。

歩けばすぐ着くようで皆が向かっている道だ。

なにを隠そう、今日の唯一の楽しみはうーにゃんとみーにゃんで

会うこと。

アトラクションも楽しみだが、何よりも出会いたいキャラクター。

マウスラングの『ニッキリン』も好きだが、可愛さはいつしかだつて負けでいい。

群がる人を押しのけてでも写真を撮りたいくらいだから。  
もちろんカメラは必須アイテムで、いつでも取り出せるように入れた位置を把握している。

「山野？」

「あつごめん」

自分の足が止まっていたことに気がつき、伊達ぐるのとじかに駆け寄る。

看板だけでもちょっとだけテーショングが上がった。

看板を横切り、入り口を急ぐ。

目的の遊園地『にゃんランド』に着いた。

入り口の門には、『wonderful word』と書かれていて、続々と人が入っていく。

その門の端に入園チケットの販売している。

たぶん入園してからは会うのは難しいから、入り口手前くらいに美穂ちゃんがいるだろう。

たぶんだけど……あの田辺が変なことさえしなければの話だが。

すでに昼近くとあって、チケット売り場はそんなに混んでいない。広いスペースで販売しているから効率がいいのだろう。とりあえず、チケットだけは買っておこうと並ぶ。

その間に連絡をぽちちと打つ。がスルスル前が進みあつて、間にチケットが買った。

ちよびよくちやうじうと携帯のメールが受信する。

「きたか？」

「うん、それっぽい。えっと……。やっぱり入園はしてるけど、入場口で待ってるって」

「じゃ急ぐか

「うん」

頷いて、入り口に向かう。  
門を潜ると、可愛らしに音楽が耳に入る。近くでパレードをやっているのだろうか。

目に入るのは綺麗に整備された花壇と植木。  
そしてもう少しおきにはメリー「ドーランド」が楽しそうに回っている。  
さやーさやーと騒ぐ子供たちの声も聞こえと、楽しい音楽。  
遊園地はやっぱり楽しそうかなきやつと改めて思った。

「あーー里美ちゃんーーー！」

「あーー里美ちゃんーーー！」

呼ばれた方に振り向けば、なんとも可愛らしい格好の美穂ちゃん。  
髪は団子に結ばれており、後ろからみたらうなじが綺麗そう。  
あと軽く化粧をしているみたいでなんともときめくし、淡い緑色で  
レースを抑えたトップスにデニムのパンツだ。  
……パンツ？って一ダッシュで駆け寄り美穂ちゃんの一度腕を掴んで、

「なんでパンツなの！？スカートじゃないのーー？」

「えー。私はパンツがよかつたからかな

てへつて笑う。美穂ちゃんは可愛いがそんな悠長に構つていられない。

「だって私は言つておりこしてきたんだから、美穂ちゃんもつて思つていたの。」

「気分ですか……気分でパンツですか……！」

「うん。やうだよ。里美ちゃん可愛い格……」

「マジかマジなのか……だったら私もパンツがよかつたよ……今から着替えてく

ぽんつと頭を叩かれた。何かと思つて振り向くと、伊達くん。

「ちよつと汗、落ち着け」

「あ……。『めん』

パニックついていた感情がちよつと治まる。

そしてくすくすっと笑う声が聞こえ、見ると美穂ちゃんが笑つている。

「そのままでいいじゃないよ里美ちゃん」

「でも……」

「似合つからいのままでこでよ。ね？」

「……わかった」

むすつと言つたが、やつぱり美穂ちやんの笑顔には弱いから、頷いてしまつ。

ちらりと伊達くんを見たら、なにやら固まつてゐるよつだ。

目線の先を追うと、どうやら彼が田辺君だらう。

髪を明るめに染めてそうなイメージでだつたキャラ男せん。でもこうして姿を捉えるとイメージが違う。

暗めの茶髪で、氣にして見なれば、黒に見える。意外にも短髪だ。しいて言つなら伊達くんよりは長いけど

細めのフレームのメガネを付けていて、あんな皿口中じやなれば、けつこうイケメンな分類に入るかもしれない。でもなぜか伊達くんは見つめ続けている。

そんな非常識な彼を、伊達くんはなぜここまで、氣にするのか私は正直わからなかつた。

ポーカーフェイスだから正直読めないけどね。

美穂ちゃんはそんな伊達くんに気づいたのか、はたまた気づいてないのか……。

固まつているにも関わらず声をかけた。

「初めてまして伊達くん」

「あー……どうも。えつと五嶋さんだつけ」

「うん。本名は五嶋美穂。今日はありがとう来てくれて」

「いや、お礼言われるほどじやなこと思ひづが」

「いいの、いいの。嬉しいから、でつ」

美穂ちゃんが言い終わる前に、事の自体が起きた。  
で隣いた田辺くんが伊達くんに抱きついてる。  
突然の行為で、田を見張る。

「会いたかったぜー！真人」

「ちょっと離せー！大和ー！」

必死にもがいてるあたり、きついのだろうか。  
遊園地まで来て、なぜこれを見せられなきゃいけないだろう……。  
でもなんとなく、さつき伊達くんが固まっていたわけがわかつた気が  
がする。

こいつと知り合いだつたわけか。

「田辺さん。伊達くん苦しそうですよ」

助け舟つてわけではないけど、ここままだと話が進まなそうだから、  
あえてつっこんでおけ。

「えつ本當やとみちゃん」

「やとみちゃんー？」

引きつりそつになりました。

まさか、まさかの田辺くんからそんな言葉を言われるなんてショック。

どんだけフレンズドリーなんだ。あなたはつとイライラがまた募る。

「えつまあそです。だから伊達くんを放して下せー」

「うーん。わかった」

そう言う田辺くんはとすぐに伊達くんを開放した。  
ぐつたりした様子の伊達くん。まだ遊園地に着いたばかりなのに、  
この惨状。

やつぱり関わりたくない人物だと改めて認識して、  
でも一様はメンバーだから、何者かだけは聞いておこう。

「で、田辺くんは伊達くんと知り合いなんですか？」

「えつ知り合いもなにも親友だけビ」

「違うだろー。ただの腐れ縁だ。高校の時からのーーー」

「それを人は友とよ「呼ばねえよーーー」ぶ」

ものすごい切れ味で、つっこむ伊達くん。  
そしてなぜどや顔して田辺くん。

「えー親友だろーーーんなに好いてるのーーー」

「きもい、近づくな、帰れ」

「もうイ・ケ・ズ（ハート）」

どす黒いオーラで、叩ききつてる。ここまで感情を引き出せないと  
が出来るなんてすごいけど。

そんなことめげない田辺くんは可憐らしくぶりっ子ポーズまで決め  
ている。

恐ろしいわこの子ーーー

「んな戯言してこる間に刻々と時間が過ぎていぐ。

「……そろそろ黙れ。大和くん」

「えつ」

今まで黙っていた美穂ちゃんが、今まで聞いたこと無い低い声で、田辺くんを暴走を止めた。  
言つか、この場をいた誰もが耳を疑つたが、変わりない笑顔と可愛らしい声で、

「もう遊園地に来たんだから、乗り物乗らないと勿体無いじゃない」

「そつそうだね」

「たしかに」

「うん」

「じゃ自己紹介も済んだし、そつぞと行きましょう」

軽やかに歩く彼女のステップ。

みんなわっさの声は……と躊躇するしかなかつた。

## 6話 集合（後書き）

遊園地については妄想です。

行き方についても、割合でたらめです。小田急の厚木から新宿まではあります……。

小説だから良いよね（おー！

## 7話 ベンチ（前書き）

書き方をちょっと変えてみたので、読みづらかったらごめんなさい。

「うう…… もちがわる……」

「こんな感じから始まるのってどうかと思うけど……。とにかく、今は気持ちが悪い!」

楽しい曲が流れていた最中で私はベンチに背を預けてぐったりして  
いる。

と云ふ事は、なつたて？

それに私が維持系を嫌いだと思は出して欲しく

轟轟轟！向かってが地元で和がかりにいた原因

「この遊園地の売りは、他の遊園地よりも乗車時間が長い事。他には落ちる所が5箇所あり、わやーと言つ可憐りしにものではなく、わやーと言つ濁音混じりの叫び声が聞こえぬとこつ有名なジンギス・コースタなのだ。

私としては、もつとも近寄りたくない場所なのに、それを五回も乗らされれば、誰だって気分が気持ち悪くなつても仕方が無い。なんたつて胃とかいろいろな物がかき回されたような感じだ。まつたくもつて耐えられたものじやない。

「大丈夫か？」

声をした方に顔を向けると、紙コップを持った伊達くんがいた。

「まだ、ちょっと気分悪いや。あはは」  
「そう」

相槌を打つた伊達くんは私のとなりに座り、紙コップを私に差した出した。

なんだかうつとと思い、髪コップを見つみれば伊達くんが、

「ウーロン茶。水分取ったほうがいいと思つて」

それから微動だにしないものだから私は仕方なく受け取る。

「あつありがとう。あつお金」

「いいよ。別に」

ぶつきら棒に言われてしまつた。

そう言われてはなんだか渡じづら。

「でも……」しないだのジュース代もあるし、ちょっと待つて……」

鞄から財布を取り出そうとしたが手首を捕まれた。

「別にいいから……」

「でつでも」

「いいから、こないだのも返すなよ」

「でも悪いし……」と言い返すかと思つたが、声が出せなかつた。なんか有無を言わせないようこ、見つめられたからだ。

仕方なく貰つたウーロン茶を飲む。

冷たくて美味しい。

「ありがとう」

「いや、俺が勝手にやつたことなんだから気にすんな

「……うん。でもありがとう」

こじは素直に気持ちを伝えておこじと、微笑んでお礼を述べた。伊達くんも釣られたのか、表情が柔らかくなつた気がした。

だいぶ気分も落ち着いた頃に、不意に違和感を覚える。元凶のアソシと美穂ちゃんがいない。

辺りを見回しても、家族連れやカッフルなどが行き合つていて見当たらぬ。

もとはと言えばアソシ……、田辺が絶叫系に有無を言わせず乗せられ、連れまわされたせいなのに。

事情を知つてそうな伊達くんに聞くのがいいだろ？

「あの……伊達くん。美穂ちゃん達は？」

「ああ。皆、山野を心配してこじに居たんだけど、俺見てるから行つてきなつて言つたからたぶん、大和の事だから絶叫系でも乗つてるんじゃないかな」

「へえ、そう」

とりあえず頷いておく。

あんだけ乗つといてまだ乗る精神がすごいわつと関心した。

これで居ない理由も納得はしたが、でもなぜ伊達くんが私の世話役に買って出たんだろう。

疑問が浮かび怪訝したが、その視線に気が付いたのか伊達くんは笑つて、

「絶叫系は普通だけどあんまり連續で乗るのは俺もキツイって伝え

たから」

「でも伊達くん。わりと涼しい顔してなかつた?」

「そんなことないよ。連続はきたな」

「そりかな?」

「そりだよ」

そのわりに私を介抱してくれる体力はあつたつてことよね。  
うーん。羨ましいような気がする。

「あと大和から連れまわしてごめんだつて、まあ今本人居ないけど。  
渋々俺が行かせたからカンベンな」

「そうなの?ああ、時間とかあるもんね。」

「ああ……それもあるけど……」

急にそつぽ向く伊達くん。  
何かあつたんだろうか。

(もしかして、私と居たかっただけだつたりして……つてそんなことあるわけないじゃん)

変な考えが頭に過ぎつたが片手で追い払う。

伊達くんが感心した声で、

「ああ見えて五嶋さんが絶叫系大丈夫なのは関心したけどなあ  
「そうね。あれで強いのつてびっくりするわよね」

うんうんと頷きあつ一人だつた。

ウーロン茶も飲み終わつたし、気分もすっかり晴れた。  
たぶん激しい乗り物意外なら大丈夫だろう。

「そろそろ行くか」

「うん。でもあの二人は？」

「しばらく絶叫乗るつて言つてたからなあ。乗り飽きたら山野にメー  
ルするつて言つてたぞ」

「あれ？伊達くんのは？」

「一人とも知らん。特に大和は教えてくない」

「はあそう」

伊達くんは変わらない表情で言われたが声のトーンが一つくらいう  
がつていたので、過去に何かあったのだなうつ。  
なにかは触れないでおくとして……。

「行つてみたい」というがあるんだけどいいか？」

「どこ？」

「//アーハウス。でかくて面白いらしいから気になつてて」

「//アーハウスか……」

ちよつと考え込んだが乗り物ではないし、建物だからきっと平氣だ  
るひ。

「いいよ。行こうつか」

「ああ」

嬉しかったのか、伊達くんの口元が綻んでいる。  
まあこんなのもいいかなつて私も笑つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9903s/>

---

ニガテを越えて

2011年8月24日12時31分発行